（ペリオ氏蒐集敦煌漢文書第二七一八に、王梵志詩、茶酒論等）、銘讃の記する所も重要の史實に關する所多からず。只だを載せ、開寳三年閻海員の書寫とせり。海員の一族なるべし）

唐末五季の頃に於る此地方に關する史書の記載甚だ備はらざる間に在りて、新たに此等の人々の小傳を得たるを喜ばざる可らず。陰善雄・羅盈達の墓誌銘には共に莫（漠）高里に葬れるを記せり。莫高里が敦煌の東南に當ることは此等の兩銘に據りて考ふれば疑無き所にして、思ふに莫高窟の名と相關するものなるべし。但だ窟が里に由りて名を得たるか、或は里が窟に由りて名を得たるかは今卒かに斷じ得べからず。

六、常樂副使田員宗啓（No. 2482, verso）

此の文書は前出陰善雄等の銘讃の裏面に記さるるものにして、紙面の末には「于時晉開運三年十二月丁巳三日己未題紀」と倒記せらる。思ふに題紀の餘白を倒に用ゐて、此の啓を書けるものなるべく、從つて書寫の時代も、當時を距ること遠きに非るべし。常樂副使田員宗に就きては今知る所無し（常樂は唐宋時代に於て瓜州の屬縣なり）。只だ此の文書が當時此の地方に於ける盜賊に關する報告として史趣少きに非るを以て、茲に收錄せり。

七、敦煌名族志殘卷（No. 2625）

殘卷は首尾共に缺けたれども、敦煌の名族を志せるものなること明らかにして、陰氏の前に接して志されたるは張氏なり。記する所必ずしも精緻と爲す可らざるも、然も此の地方の世族に關しては今傳へらるる所殆んど存せざれば、殘卷の價値決して少しとせず。